

2002 . 前期 / 指導教授：宮崎先生

日本語教育学理論研究

第二言語習得論 プロジェクトワークA

日本語教育研究科修士課程2年 高木美嘉

課題 : コミュニケーション能力の習得を目的とした日本語教科書を1冊選び、その中から調整行動を含むディスコースを選んでその調整パターンを分析する。  
あわせて、談話習得からみた教科書分析も行う。

提出日 2002年7月24日(水)

分析した教科書：『新日本語の中級 本冊』海外技術者研修協会 編著 / スリーエーネットワーク (2000.9.20 初版発行)

\* 副教材として、英語による語彙解説書、CD、英語による文法説明書がある。

## 1 . はじめに : テキストの説明

### テキスト発刊の目的

『新日本語の中級』は、海外技術者研修協会が、各国からの産業技術研修生の企業への派遣に先立ち、一般研修として行っている日本語クラスのテキストとして作成したものである。すでに初級のために、同協会から『新日本語の基礎』が発刊され使用されてきたが、企業から技術習得のためのより高度な日本語力を求める声が1980年代以降高くなったので、1992年より中級テキストの開発に着手し、2000年に発刊するに至ったという。

### 習得目標

このテキストは、『新日本語の基礎』の初級レベルを終了した人が、既習の知識を統合し、実社会で役立つ実践的会話能力を身につけ、日本人との豊かなコミュニケーションができることを目指している。

### テキストを貫く舞台設定と登場人物

日本にある「東京コンピューター」「横浜自動車」「日本建設」という架空の企業を舞台に、企業に関係した「研修センター」や「社員寮」という周辺環境の設定、そして、社内外での登場人物が設定してある。

主な登場人物は、4人の外国人研修生（中国人2人、タイ人1人、韓国人1人）で、彼らと彼らを取り巻くいろいろな立場の日本人との人間関係（上司 部下、寮の人 寮生、同僚、先生 学生など）が設定されている。

### 1課の習得目標

会話を中心に、研修生が研修先に赴き、社内、あるいは地域社会で必要となるであろうコミュニケーションの目的や場面の中から、優先順位の高いものを20課分選んで、基本的なものから配列したという。

- 1課：尋ねる / 確かめる
- 2課：電話で連絡する
- 3課：頼む
- 4課：許可をもらう
- 5課：誘う / 断る
- 6課：訪問する / 紹介する
- 7課：症状を伝える
- 8課：買い物する
- 9課：道をたずねる
- 10課：手順を説明する

- 11 課：人とつきあう（おごったり、おごられたり＋贈り物をあげる、もらう）
- 12 課：比較する
- 13 課：苦情を言う／謝る
- 14 課：ほめる／けんそんする
- 15 課：仕事について話す
- 16 課：例える
- 17 課：相談する／提案する
- 18 課：計画を立てる
- 19 課：意見を述べる
- 20 課：環境を考える

#### 1 課の構成（提示順に）

導入部（その課で達成すべき行動目標の確認、その課の話題や内容についての既知知識の確認など）

学習項目（その課で学ぶ基本文型や表現の揭示）

会話 1、2（典型的なパターンで、人間関係を変えたもの 2 つが基本）

読み（タイプ 1．研究生が日本で目にする可能性のある看板、手紙、案内などを読むことで、社会生活の幅を広げる。

タイプ 2．日本事情の紹介や問題提起の文章を読み、ディスカッションにつなげる）

文法練習（ドリル）＋会話練習（短い会話練習）

活動（ロールプレイ、タスク活動、ディスカッション、ディベート、課外活動など）

聴解（その課で学んだ内容や文法項目についての聴解能力を伸ばす練習。CDあり）

## 2．『新日本語の中級』における、調整行動を含むディスコースの調整パターンについて

次に、テキストの会話（ディスコース）に焦点をあてて、調整パターンが見られる箇所をみていく。

このテキストの会話の特色は、ほとんどが接触場面を扱っていることである。日本に企業研修に来た非日本語母語話者が、日本の実社会で役立つ実践的会話能力を身につけ、日本人との豊かなコミュニケーションができることを目指しているため、会話の登場人物は、基本的に非日本語母語話者と日本語母語話者で、彼らが日本の会社生活で遭遇しそうな接触場面や状況が設定されている。

会話のトピックも、初級日本語学習者が遭遇しそうな接触場面を考慮しているようだ。たとえば、非日本語母語話者が日本の企業に入っていったとき、日本の実際の会社で話されている口語的な表現が聞き取れなかったり、専門的なことばの意味がわからなかったりすることが多いと予想されるからか、このテキストではまず 1 課で、会話でどうやって調整を行うかについて練習を行う。次に、各課における調整行動のタイプをみてみる。

## 1 課「尋ねる / 確かめる」のディスコースの調整パターンについて

1 課の学習目標は「尋ねる / 確かめる」である。学習目標として掲げられているのが、

- 1 . 漢字の読み方や言葉の意味が尋ねられる。
- 2 . 聞き取れなかった内容が尋ねられる。
- 3 . 看板や表示を読んで、意味が確認できる。

の3つである。

まず会話1は、駅の案内板を見て、わからない言葉があったとき、一緒にいる日本人に尋ねるモデル会話である。調整行動としては、以下が提示されている。 から まですべて、案内板をみて、そこで分からない言葉を「他者マーク」としていると解釈した。

## 「みどりの窓口」という案内板を見て

李	ああ、明日休みの人が多いんですね。あの、小川さん、あそこに「みどりの窓口」って書いてありますね。あれはどういう意味ですか。	他者マーク(説明求め)	複合
小川	ああ、あれは指定席券とか新幹線の切符とかを売っている所です。	(偽)自己調整(説明)	
李	指定席券...ああ、そうですか。	他者マーク(くり返し+いいよども)他者調整(了承)	

## 「お忘れ物取り扱い所」という案内板を見て

李	あの、あれは何て読むんですか。「お忘れ物取り...」	他者マーク(説明求め+いいよども)	複合
小川	ああ、あれは「お忘れ物取り扱い所」。	(偽)自己調整(説明)	
李	忘れ物をしたら、あそこへ行けばいいんですね。	他者マーク(言い換え型確認要求)	
小川	ええ。	自己調整(了承)	

## 「時差通勤に御協力ください」という案内板を見て

李	あの、「時差通勤に...」というのは、通勤時間を短くしましょう、っていうことですか。	他者マーク(確認要求)	単純
小川	いいえ、そうじゃなくて、みんな違う時間に会社に行きましょう、っていうことです。	自己調整(説明)	
李	ああ、ラッシュがすごいからですね。	他者マーク(言い換え型確認要求)	
小川	ええ、そうです。李さんの国でもそうですか。	自己調整(了承)	

案内板を見て、不適切さをマークする方法が3つ(説明求め、いいよども、確認要求)

提示されている。

FS： あそこに「みどりの窓口」って書いてありますね。あれはどういう意味ですか。(説明求め)

FS： あれは何て読むんですか。「お忘れ物取り...」(説明求め + 言いよどみ)

FS： 「時差通勤に...」というのは、通勤時間を短くしましょう、っていうことですか。(確認要求)

これらに対して、「話し手」ではないが(ゆえに表では(偽)と記す)、NSとして案内板の語彙を説明するという調整方法が3つ(説明)提示されている。

NS： ああ、あれは指定席券とか新幹線の切符とかを売っている所です。(説明)

NS： ああ、あれは「お忘れ物取り扱い所」。(説明)

NS： いいえ、そうじゃなくて、みんな違う時間に会社に行きましょう、っていうことです。(説明)

これらに対して、FSは、もう一度自分の理解を確認するために、不適切マークを出して、相手に再度の調整を求めている。 は、「言いよどみ」がさらに不適切マークの「フラッグ」となるが、結局「ああ、そうですか」と自分で調整(了解)して終わっている。

FS： 指定席券...ああ、そうですか。(繰り返し + 言いよどみ + 了解)

FS： 忘れ物をしたら、あそこへ行けばいいんですね。(言い換え型確認要求)

FS： ああ、ラッシュがすごいからですね。(言い換え型確認要求)

最後に、これら3つのフレームデザインについてであるが、 は、「みどりの窓口」の意味に関する調整が行われたあと、さらに、FSが「指定席券」ということばで新たに不適切マークを出していると考え、「複合調整」と考えられる。 は、「お忘れ物取り扱い所」の読み方について調整が行われたあと、次にその意味についての調整が行われていると考え、「複合調整」と考えられる。 は、「時差通勤に御協力ください」の意味について調整が続くので「単純調整」と考えられる。

次に、会話2は、駅のアナウンスを聞いて、わからないことばがあったときに不適切マークをするモデル会話である。調整行動としては、以下が提示されている。FSは、アナウンスを聞いて、そこで分からない言葉を「他者マーク」としていると解釈した。

#### 会話2 駅のアナウンスを聞いて

アナウンス	毎度御利用くださりましてありがとうございます。当駅では、朝7時から9時30分まで、夕方5時から7時まで禁煙タイムを実施しております。この時間内のおたばこはご遠慮ください。		
馬	禁煙...何て言っているんですか。	他者マーク(言いよどみ + 説明求め)	単純

山口	禁煙タイム、禁煙時間のことです。	自己調整(言い換え型説明)	
馬	ああ、time。どこの駅も禁煙タイムは同じなんですか。	他者マーク(言い換え) 他者調整(了承)	

F Sは「禁煙...」と言いよどむことで、不適切マークをし、「何と言っているんですか」で直接、調整を要求している。そして、F Sは、「ああ、Time。」と自分で英語に言い換えて、自分自身で調整を行っている。

さて、1課では、以下のような会話の練習がある。これらの調整行動はある1つの調整パターンの練習となっている。それは、F Sが案内表示を見て、まずその読み方を尋ねる「他者マーク」をし、そのあと意味を尋ねる「他者マーク」をする、というパターンである。この練習は、文型を覚える、というタイプのドリルとして提示されているようにみえる。「～って書いてありますね、あれは何て読むんですか」とマークし、「～？」と相手の言葉を繰り返してから、「どういう意味ですか」とさらにマークし、相手は「～ということです」という調整をする、という、文型を覚えるタイプの練習となっていると考えられる。

例)	案内表示「下り口」		
李	小川さん、あそこに「下り...」って書いてありますね。あれは何て読むんですか。	他者マーク(説明求め)	複合
小川	ああ、あれは「おりぐち」です。	自己調整(説明)	
李	「下り口」？ どういう意味ですか。	他者マーク(くり返し+説明求め)	
小川	こちらの方から下りてください、ってことです。	自己調整(言い換え型説明)	
李	ああ、そういうことですか。		

1)	案内表示「本日定休日」		
李	小川さん、あそこに「本日定休日」って書いてありますね。あれは何て読むんですか。	他者マーク(説明求め)	複合
小川	ああ、あれは「ほんじつていきゅうび」です。	自己調整(説明)	
李	「本日定休日」？ どういう意味ですか。	他者マーク(くり返し+説明求め)	
小川	今日は休みだってことです。	自己調整(言い換え型説明)	
李	ああ、そういうことですか。		

2)	案内表示「お忘れ物取り扱い所」		
----	-----------------	--	--

李	小川さん、あそこに「お忘れ物取り扱い所」って書いてありますね。あれは何て読むんですか。	他者マーク(説明求め)	複合
小川	ああ、あれは「お忘れものとりあつかいじょ」です。	自己調整(説明)	
李	「お忘れ物取り扱い所」？どういう意味ですか。	他者マーク(くり返し+説明求め)	
小川	忘れ物をしたら、あそこへ行けばいい、っていうことです。	自己調整(言い換え型説明)	
李	ああ、そういうことですか。		

### 9課「道を尋ねる」のディスコースの調整パターンについて

9課では、「道を尋ねる」ときに、FSが、相手の言った場所の名前が聞き取れないことが多いという想定のもとに、相手のことばの中で、分からなかった箇所を「くり返す」というマークの仕方を提示している。また、その言い方も、「京、葉、線?」「舞、浜、」と一字ずつ区切って発音するというストラテジーも提示している。

田村	ええ、そう。で、東京駅でJRの京葉線に乗り換えて...		
馬	京、葉、線?	他者マーク(くり返し型説明要求)	単純
田村	ええ、京葉線の舞浜っていう駅で降るの。	自己調整(説明)	
馬	舞、浜、ですか。	他者マーク(くり返し型説明要求)	
田村	そう。東京駅から大体30分ぐらい。どの電車でも行けるから、大丈夫よ。	自己調整(説明)	

### 20課「環境を考える」のディスコースの調整パターンについて

20課の学習目標は、ある問題について自分で考え、それを日本語でまとめて発表したり話し合ったりすることにある。ディスコースに関わる項目としては、「説明」に関わる文型が多いが、会話2の中に「相手の言ったことに驚きながら、聞き返す」というマーカーがあった。実際、こうしたマーカーは、初級段階の学習者はなかなか日本語で出にくいので、練習する必要がある。

李	田村さん、どこへ行くんですか。そんなに缶ビール持って。		
田村	スーパーよ。		
李	えっ!	他者マーク(聞き返し)	単純
田村	これ、空っぽなの。スーパーにアルミ缶収集機っていうのがあってね、それにアルミ缶を入れると、お金が出てくるの。2個が1円の割合でね。	自己調整(説明)	

### 3 . 談話習得からみた『新日本語の中級』の分析

『新日本語の中級』における談話習得上の問題点は大きく2つあると考える。

問題点の1つは、モデル会話の設定において、接触場面としての「場面、状況」は考慮されているが、「調整行動」についてはほとんど考慮されていないという点である。1.と2.で分析したように、『新日本語の中級』の会話は、初級日本語学習者が遭遇しそうな接触場面を考慮しているにもかかわらず、調整行動に関しては主に1課で扱っているだけで、他の課ではほとんど扱われず、会話の多くが、ある限られた人間関係と場面における典型的な文型を使ったモデル会話となっている。

たとえば、3課「頼む」の学習目標は、「1.何かを頼む前に、理由が説明できる、2.いろいろな頼み方が工夫できる」の2つが提示されている。そして文型の学習項目としては、寮生から寮の管理人に対する「～してほしいんですが」という強い依頼と、会社の同僚同士の「Vていただけませんか」という丁寧な依頼の、計2つが提示されている。また、頼むときの事情の述べ方「ことになったんです」や、「ちょっとお願いがあるんですが」のような文末の省略などが主に提示されている。

こうした学習項目は、すべて文型という形で提示されている。「頼む」という大きなコミュニケーションに関わる項目でありながら、こうした文型学習の形をとっているのは、このテキストの初級編『新日本語の基礎』(あるいは同系列として『みんなの日本語』)が、文型習得を目的としたテキストで、このテキストの学習スタイルを受け継いでいるからと推測する。前編というべき初級テキスト『新日本語の基礎』も、たとえば「依頼」という相互交渉を前面に押し出したシラバスではなく、また「依頼」に関する談話習得を目的としていない。このテキストに沿って初級授業を受けた学習者は、「依頼」という相互交渉の観点での会話練習の経験は少なく、相互交渉を通じて自分で自分の会話を修正したり、相手の発話を確認したりする機会を十分に経験しているとはいえないので、調整行動を意識化する機会もなかったと予測できる。

こうした学習者が、『新日本語の中級』の3課で、具体的なある場面と人間関係の中で、文型項目として「～ていただけませんか」「～してほしい」を学習することは、結局またある特定の場面と人間関係における、ある特定の文型学習の続きとなることが予想される。会話に何か問題が起きたときに自分で調整を促し、そしてそれを理解していくという「依頼」の談話の過程を、ここでも習得できないことになる。

また、もう1つの問題点は、提示された典型表現と談話の展開の見せ方である。会話の設定が企業研修生の現場に徹底しているので、ときどき課によっては、挙げてある項目の典型表現とはいきれないものが提示されている。たとえば3課の「～してほしいんですが」は、依頼の用件の妥当性が高い場合の強い依頼であると考えられ、典型を提示するならば、「～てくれませんか」「～てもらえませんか」を中心に、人間関係や場面を変えながらいろいろな表現を提示していくほうが、様々な状況に対処できる談話の進め方の習得が可能になるだろう。

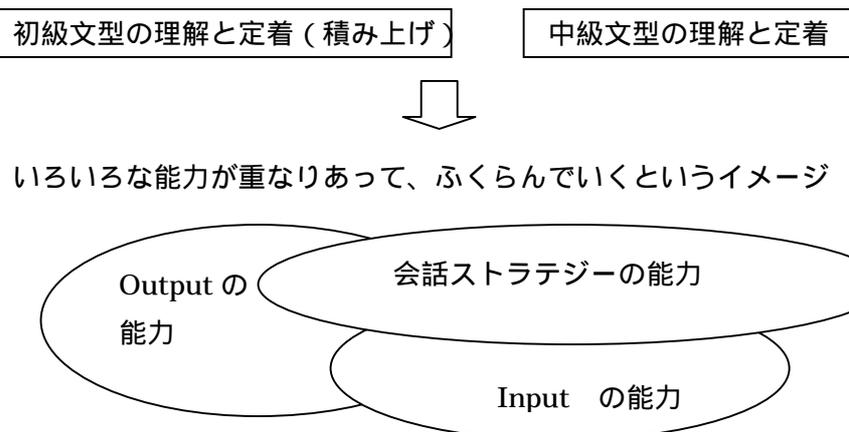
また、モデル会話には、談話を展開していく工夫がみられ、「活動（ロールプレイなどのタスク）」では、談話を2人で作っていくような練習があるが、会話例の空欄にキューを変換して入れる代入練習や条件の与えられた応答練習が多く、つまり、学習者にとって話の展開や結末が見えているような会話練習が多いため、結末のみえない実場面での談話の進め方を、真に自分のものとして学習する機会を与えられないと考える。

さて、以上の考察をもとに、談話の習得を促す目的でこのテキストを使う教授者が補足する観点を、以下のように提案してみたい。

このテキストの前の段階で学習者が積み上げる形で獲得した知識を、自分の文脈で整理し、確認することを目的に、各課の項目において、自己確認や修正、発話の相手との調整行動を意識的に経験させる機会をつくる。そしてその過程で、新しい語彙や文型を、提示したり、自分で獲得させたりしながらふくらませていくことで、談話の習得を促す。

この発想の転換を、図式で表してみると、

1つ1つを積み上げていく、というイメージから...



たとえば、テキストを補う具体的な方法を挙げると、学習項目に合わせてその典型表現や典型会話をできるだけ初級文型を使って練習する機会を導入時に作る。そのときに、接触場面を考慮に入れて、自然な形で調整行動を取り入れられるような活動、例えば、ピジターセッションなどの機会を与えて、それをテープやビデオで記録にとり、その後、学習者自らが、それらの記録をもとに、自分の調整行動をふりかえりそれを意識化することが必要であると考え。そして、それをもとに、新しい項目へと入っていくという流れが1つの方法として考えられる。

さて最後に、以上の観点をもとに、『新日本語の中級』に加える学習項目を具体的に考えてみた。テキストに加える項目として、以下の2つの内容を提案してみたい。

## 1. 調整行動の意識化

調整行動を談話習得に取り入れる場合、単に「聞き返し」の練習に終わってしまっただけでは、いろいろな場面に対応するストラテジーの習得にはつながらないと思う。実際の会話は「聞き返し」た後でも調整は続くことが多く、相手の調整を受け入れ理解する能力も同時に必要だからである。

会話において、自分が何がわからないのか、伝えたいことは何なのかについて、意識化し、それをどう調整していったらいいかのデザインを自分でつくれるようになることが習得につながると考えるが、これを授業として行うには、授業としての工夫が必要になってくる。

たとえば、『新日本語の中級』の場合、会話が接触場面であることを活かして、これを覚えるだけでなく、同じような場面を設定して、ビジターセッションなどを行い、その内容をフィードバックする方法が考えられるだろう。学習者の内省を促し、自分が会話において何を達成したかったのか、そのためにどのような調整のデザインを行おうとしたのか、発話の相手の調整をどう受け取ったか等を語らせることも、談話習得を真に促進するきっかけになると考える。

## 2. いろいろな場面に対応できる表現やストラテジーの追加

このテキストの会話の問題点、場面が限られているうえ、典型ともいえない表現の中途半端さを改善するために、以下のような項目を追加する、という方法も考えられる。

特に相手との人間関係に関係がある学習項目

1 課：尋ねる / 確かめる

相手の発話の中でわからない項目をマークし調整する

2 課：電話で連絡する

電話での調整行動 / 留守電への対応 / 学校へ休みや遅刻の連絡をする

3 課：頼む

「～していただけませんか」「～してくれませんか」などの表現と使用場面の追加

4 課：許可をもらう

「～でもいいですか」「～でもよろしいですか」「～させていただきたいんですが」などの表現と使用場面の追加

5 課：誘う / 断る

「～ませんか」「～ましょう」「～はどうですか」「(理由)ので、ちょっと…」などの表現と使用場面の追加

6 課：訪問する / 紹介する

「ごめんください」「おじゃまします」「失礼します」「遠慮無く」「そろそろ失礼します」「ごちそうさまでした」「こちらは～さんです」などの表現

#### と使用場面の追加

- 11 課：人とつきあう（おごったり、おごられたり+贈り物をあげる、もらう）  
贈りものをあげたりもらったりしたときの言い方の人間関係別のバリエーション
- 14 課：ほめる / けんそんする  
相手の何をほめるのか / いつほめるのか（「ほめ」は人間関係を始めるのに有効であることの意識化）
- 17 課：相談する / 提案する  
人間関係を調整するようないろいろな表現の追加（たとえば、人間関係によるいろいろなはげましの表現とその効果の提示「がんばってくださいね」「~たらできるかもしれませんよ」「元気だしてください」）

情報をできるだけ正確に理解し、伝える。また、相手の考えを理解し、自分の考えを的確に伝えることに関する学習項目

- 7 課：症状を訴える 症状を伝えるときの調整行動
- 8 課：買い物する 物の形容 / 買いたいものを取り寄せる / 買った経緯を説明し取り替えてもらうときの調整行動
- 9 課：道を尋ねる 複雑な道順を尋ねる、またそれを聞いて理解する調整行動
- 10 課：手順を説明する 使い方、作り方を説明する、聞いて理解する調整行動
- 12 課：比較する 抽象的なもの（値段、印象など）を比較して自分の考えを説明する
- 16 課：たとえる 比喩を使って物事を説明する
- 18 課：計画を立てる 店やホテル、役所など、公共施設で、相手と相談しながら計画を立てるストラテジーの習得
- 19 課：意見を述べる / 20 課：環境を考える 相手との意見の交換の会話。相手の意見を確認したり、聞き返したりするストラテジーの習得

#### 4 . おわりに

『新日本語の中級』における、調整行動を含むディスコースの調整パターンについて考察した結果、接触場面を扱っている会話であっても、モデル会話の反復を方法論としてしまい、学習者が自分自身でストラテジーを持って調整するという習得目的を持っていないことがわかった。こうした談話習得から一歩進めるために、3 . で改訂案の提案を行ったが、今後さらに現場での検証をすすめ、学習者が会話の途中で何か問題が起きたときに、自分自身で調整が行えるような談話習得の方法をさらに提示していきたいと考えている。